

一緒につくる行事の楽しさの先に

つばさ共同保育園 園長 前川良太

5月27日(土)に今年度初めの行事の親子まつりを行いました。親子まつりは「新入園家庭の紹介、保育士と保護者一緒に企画する行事を楽しむ、親子の交流の場」という3つを目的に行っています。ですがここ数年はコロナ禍ということもあり、保育士主導で散歩等の取り組みが主になっていました。そこで今年は職員の最初の実行委員会で「保護者と一緒につくる」という原点に戻って一緒に楽しむことにこだわる親子まつりにしようという意気込みからスタートしました。久しぶりの共同企画でしたが、イベント係さんだけではなくてたくさんの保護者の方がクラスの企画や全体の運営を共にし、コーナーごとに打合せをも行っていました。また今年度は各クラスのコーナーだけではなく、再出発したゴリラの会(お父さんの会)、育む会(アトムつばさOBの会)、WEWISH(職員有志の会)のコーナーも参加しました。びしょぬれになって子どもを楽しませたり、我が子以外の子どもともパワフルに遊んでくれたりするお父さん。段取りよくコーナーを切り盛りするお母さん。駐車場の係で一生懸命声掛けしてくれるおじいちゃん。そんな光景を懐かしいなと口にするOB保護者。大声で笑う職員。そして楽しそうな子どもたち。そんなみんなの姿を見ていると、つばさの行事ってこんなやっただでなと胸にくるものがありました。

また、12日には昨年度卒園したあるお父さんが提案してくれた「えんぱわめんと唄」を講師に招いて、性と生の合同研修会も行いました。子どものふとした一言や行動から性について子どもたちとどう考えようかと、長年4、5歳合同懇談会で取り組んできたテーマでもあります。ですがいつしか私たち職員でさえも「性について子どもたちへ語っていくことが必要」と形骸化したスローガンだけが残り、“なぜそうするのか”が抜け落ちたまま、語り合うにはどうすればいい?という方法論にばかり視点があるような懇談会になりつつありました。しかし今回の研修会を通してそんな「なぜ」の部分がようやく腑に落ちたように思います。そしてそれは、子育てする親としての子どもへの向き合い方についても考えさせられることでもありました。性について子どもと語っていくことは、子どもの人権を尊重することと地続きにあることです。いやなことはいやと言っていいと保育で子どもに伝えることと同じく、自分らしく生きる、あなたの体はあなたのものと、生きることの根底を伝えていく同じ道筋にあるのだということがよくわかりました。まさに自分たちの足りないところがどこか、それを補うにはどんな方法が良いかと、一緒に考えてもらえたからこそ実現した研修会でした。そしてそんな場を保護者と共に経験できたことが何よりうれしいことでした。つばさからは2家庭、アトムからは6家庭、提案してくれたお父さんも駆けつけてくれました。立場を越えて一緒に学び合う機会を持てたことが何よりやってよかったと思えた出来事でした。



今月の2日には急遽給食室の企画で「おみそ汁の会(仮)」を行うことにしました。具材は保護者の方にもカンパいいただいて、一緒に調理し、夕方お迎えに来たらテラスでほっこりとみそ汁を飲む…たったそれだけの企画です。でもなんだか想像すると素敵な画が浮かびませんか?あえて企画の中身をつくり込まず、会の名前も(仮)にしてあります。それは保護者の方と一緒にこれから作りながら楽しんでいく余地を残しておきたいと思ったからです。そんな余白と一緒に埋めながら育てていける会になればと思っています。夕方車が込み合うことが予想されます。できるだけ近隣にお住まいで可能な方は、徒歩でのお迎えの協力をいただくと、その分ゆったり過ごしてもらえると幸いです。

私たち職員は保護者の皆さんをお客さんではなく、行事も保育も子育ても共にする仲間と思っています。当日の楽しさは行事の魅力のほんの半分です。残りの半分は共につくる過程にあるのではないのでしょうか。異次元の子育て対策と耳障りよい言葉だけが先行しますが、本当に安心して子育てするには一人で子育てしなくてよいと思えるようになることです。それは決して異次元の話ではなく、こうした日々の生活の中で、一緒に重荷を分け合える仲間に出会い関係を育てていくことこそが、激動の子育て期を支えるものだと思いますか?それはこんな風になんてことない行事や日々の保育と一緒に考え楽しみ、次はこんな風にしよう!と試行錯誤する楽しさの先にこそ生まれるはずですよ。